

論文内容の要旨

氏 名	陳 高峰
論文題目	村上春樹の「総合小説」と物語論
要 旨	
村上春樹は、初期の「鼠」四部作から『1Q84』まで、着実に自分なりの「総合小説」を書き続けてきた。それらの作品群は、処女作の単純な話から、次第に「いろんな話が出てきて、絡み合い」になって、「るつぼ」のような「総合小説」たる作品になってきた。 日本では、政治上の事件や人物を題材とし、ある政治思想の主張を目的とする政治的な小説のジャンルがある。 このようなジャンルからすれば、村上春樹の作品は政治的な小説ではない。しかし、彼の作品に数多くの政治的な要素が含まれていることは紛れもない事実である。 本稿は6章で構成されている。先ず、年代順に村上春樹の長編小説を読みながら、彼が語る「総合小説」に含まれるこれらの政治的な要素について考察し、最後に村上春樹の物語論について考察する。 本稿の構成は以下の通りである。 1、政治的な要素を含む『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』 2、「高度資本主義」社会を批判する『ダンス・ダンス・ダンス』 3、戦争と政治家を批判する『ねじまき鳥クロニクル』三部作 4、戦後の日本を象徴する『海辺のカフカ』 5、最新の「総合小説」である『1Q84』三部作（BOOK1、BOOK2、BOOK3） 6、村上春樹の物語論 第1章では、『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』を、「博士」と「私」、「計算士」と「記号士」、「組織」と「工場」、「やみくろ」、「森」の役割、「僕」の責任を取る選択、戦争の姿、その他、ノンフィクションである『アンダーグラウンド』や講演の「壁と卵」などの面から分析していく。	

第2章では、『ダンス・ダンス・ダンス』を、高度資本主義と「我らの時代のフォークロアー高度資本主義前史」、「僕」という語り手、「耳のモデル」の彼女、「いるか・ホテル」、「羊男」、「牧村拓」という男、「五反田君」という人物、作者についてなどの面から考察する。

第3章では、『ねじまき鳥クロニクル』を、1984年から1986年までという時期の意味、「綿谷ノボル」とう人間、「クミコ」の家族、占い師「本田」から見たノモンハン戦争、「間宮中尉」から見たノモンハン戦争、日本と戦争、村上春樹の中の日本人、政治家の偽り、『ねじまき鳥クロニクル』の中でノモンハン戦争が書かれた理由などの面から考察する。

第4章では、『海辺のカフカ』を、「田村カフカ」のナチス批判、「大島」のくうつろな人間＞批判、「佐伯」と彼氏の死について、戦争の影と「ナカタ」の戦争記憶、戦後日本の社会と天皇の戦争責任、村上春樹の語りなどの面から考察する。

第5章では、『1Q84』を「青豆」と「天吾」、「ふかえり」の反「リトル・ピープル」グループの役割、「マダム」、「タマル」、「青豆」殺人グループの結成と運営及び実行、「銃撃事件」と「NHK集金人」事件、「1Q84年」という世界、「牛河」と彼の狙い、「天吾」の父親と戦争の影、「リトル・ピープル」なるもの、「深田保」、「さきがけ」とオウム、村上春樹の語りなどの面から考察する。

第6章では、物語論の立場から、マジック・リアリズムで書かれた非現実的出来事と村上春樹にとっての小説を書くことの意味を論ずる。マジック・リアリズムで書かれた非現実的出来事の部分では、『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』における「計算士」の仕事、つまり、「洗い出し」と「シャフリング」の話、「僕」が「影」を切り捨てる話、「夢読み」とその資格を与えること、死んだ人との再会や会話、『羊をめぐる冒険』における「僕」と自殺した「鼠」との再会、『ダンス・ダンス・ダンス』に登場する「僕」と「キキ」との電話によつての会話、『ねじまき鳥クロニクル』における「僕」が「壁抜け」して「綿谷ノボル」を襲撃した話、『海辺のカフカ』における生霊、2人の兵士の話、森の中の村、『1Q84』における「処女懐胎」の話などについて考察し、次に村上春樹にとっての小説を書くことの意味を考察する。

村上春樹にとって、物語は世界中にある物語の共通部分を活用して、それを生活の延長線上にあるものとして高めて、人の心の深い部分に届く物語として提示していき、人に読

みたいと思わせ、人が読んで楽しいと感じさせ、そういう過程の中で、人を深い暗闇の領域に引きずり込んでいける力を持ったものである。そのような物語をできるだけ簡単な言葉で、できるだけ深いものごとを、小説という形で語るのは、文学そのものである。